

このことが県内へ布達されたのは十一月二十四日以降のことである。藩士らにそのことを伝える布告には「根もなき説を伝唱し、人心を惑しむ」（小笠原文庫一八五「職制」）ようなことが無いよう注意している。また、大庄屋らに対しては「事務の義、これ迄通り当県において取り扱」うので、「相替わる義もこれ無く」と伝え、庶民たちに心得え違いがないよう教諭するよう指示している（長井手水大庄屋文書明治四年「未御用日記」十一月二十九日条）。

この後もしばらくは元豊津県庁における事務の取り扱いは行われたが、小倉室町に開かれた小倉県庁への事務の委譲は進んだ。また豊津県庁（及び付属機関）の土地、建物も一部を除いて小倉県に引き継がれ、明治七年（一八七四）に旧藩士を対象にして競売にかけられている（藩都・豊津」参照）。

第五節 秋月の乱

（一）士族たちの動き

士族の反乱 士族の反乱をどのようにとらえるか。多くの場合は封建制度の崩壊からくる、封建的特権を持つていた藩の家臣団が、版籍奉還（明治二年＝一八六九）後は士族となつて、次々と封建的特権を失っていく過程で起こつたとされる。幕府権力の崩壊と藩体制とが同時に崩壊したのではなく、また、

新たに維新変革がなされたのではなかつたところに由来している。

士族の反乱はそのほとんどが畿内より以西、とりわけ九州を舞台にした。これは、先述の東北戦争との対比をすれば歴然とする。鳥羽・伏見の戦い以降、こぞつて新政権側についた西国の諸藩には“藩体制”が、新政権の、薩長の討幕派の強固な意志の洗礼を受けることなく残存したところにある。反対に、東北諸藩は奥羽越列藩同盟で反政府側に立ち抵抗したために処分された。とりわけ会津・庄内藩は壊滅的な打撃を受けた。列藩同盟の諸藩は、軽重の差こそあるが、その領地は削減されたので、家臣団はその制裁を充分に被つた。

ところが、もともと九州地域が、西南雄藩の討幕派士族を中心とする政権の支持母体地域でもあるにもかかわらず、新政権にとって士族の反乱が九州と山口に集中する現象は非常に困つたことでもあつた。その背景は、同じ西南雄藩の出身者が、一方は新政府の要人となり、多くの在藩の士族大衆は時勢に取り残されたまま温存されていたことが大きい。その上、新政府の中心は九州とは逆方向の東京に中心地が移つてしまい、九州は一挙に一地方の遠隔地に再び戻つてしまつた。長崎貿易も、横浜港の繁栄によつて閑散となつてしまつた。このように、新政権の支持基盤であつた西南地域は、一挙に疎外感を味わう地域として、鬱積したエネルギー（疎外感）が充满した地域となつてしまつたのである。

士族の反乱の歴史的評価はさまざまであるが、一般には明治維新によつてなされた日本の近代化に対する反抗・抵抗、封建的な反動と考える傾向が強い。しかし、彼らの考え方には幕末以来の尊王攘夷思想の継承面と同時に後の自由民権運動への志向も発足させた側面も見逃せない。また、西南戦争後、民権運動を経過

することによって、新しく国権論へと展開していく面も生んだのである。次のような捉え方もある。

明治元年（一八六八）から明治十一年（一八七八）の一〇年間は、政治的には、西南雄藩の間の分裂と融合の繰り返しを中心とする統一国家確立への政治闘争であった。これは討幕派が討幕の過程で抱え込んだ課題が、討幕を果たした後にも持ち越された結果である。そして、複合した多くの政治的・経済的な問題が次第に整理されていく過程の一〇年間であった。可能性も多様性に富んでいたが、また一方ではそれは単一化、排除の過程でもあったのである。すなわち一〇年間は討幕派による討幕派の自己否定運動であったということが出来る。だからこの過程に対し、最も強力な抵抗を示したのが士族であつた。もちろん、広範な、全国で頻発した農民一揆も忘れてはならない。士族の反乱として取り上げなければならないものは、具体的には、明治二年（一八六九）一月五日の横井小楠暗殺事件から十一年五月十四日の内務卿大久保利通（だいきみち）が暗殺された紀尾井坂事件までを含む集団的武力行使ないし個人的テロ行為を含むものである。

士族の反乱の遠因

士族の反乱の遠因と九州方面の集中性は明治新政府政権の政権の在り方にあつた。つまり、主勢力は薩・長・土・肥いずれも西南地域の出身者であり、明治六年（一八七三）の征韓論政変の敗退による西郷の下野後の政権内部の実権者は大久保利通であつた。西郷の下野は追放でもなく、官職を奪われたのでもない。とすると、西郷対大久保の対立が、東京対九州の対立という形で拡大したこと意味した。その上に、民権議院設立問題が重なつたのである。江藤新平・板垣退助はこの建白書の提出までは政府内部の者であつたし、前原一誠も同様であつたと考へてよい。このように政治政権一大久保体制に対する部内反対者の下野の地域が、それぞれの西南・九州地域であつたことが、この士族反乱を

これらの地域に集中させた主たる原因であった。明治政権内で生じた征韓論争から、三つのコースが現れたのである。大久保路線と西郷路線、板垣路線の三つである。士族の反乱は西郷体制に呼応する性格を持つたものであり、板垣路線も浸透していたので、双方すなわち土佐と鹿児島に挟まれた福岡・佐賀・肥後・大分などでは迷走する姿—民権論者が西郷軍に合流したりする例—が見られるのもこういった事情である。「自由民権」運動の推進者が、西郷体制への呼応路線の「武力抗争」に走ったり、またその逆の場合の板垣の「自由民権」路線を展開したりもしたのである。つまり、武力反抗の挫折から自由民権運動が盛んになるとといった見方では理解出来ない、複線的・複々線的な動きがあったと見なした方がよい。改めて言うまでもないことだが、士族の反乱の九州における集中現象は、明治六年の征韓論政変を直接の契機として起こったのである。

こういう事情に至った維新政権の性格づけをしておかなければならぬ。明治二年（一八六九）一月、版籍奉還が薩長土肥四藩主の上表によつてなされた。まだ東北戦争終結の余燼^{よじん}が残っていたさなかに行われ、彼らの行動は最高の「勤王」・「忠義」を果たす形であった。しかし、結果は、彼らの思惑と大いに懸け離れたものであった。全藩知事の家禄は実収石高の一〇分の一に制限され、主要な権限は新政権に吸収された。残されたものは藩債と、討幕藩においては膨大な藩兵であった。また、藩制は七月に太政官官制の改正とともに、その官制の中に系列化された。さらに翌三年九月には「藩政の改革」が指令され、いつそう藩の独立性は低められたのである。

明治四年（一八七一）には廃藩置県が断行され、雄藩連合の上にたつ新政府を脱皮・否定したのである。

第8表 主要士族反乱一覧

年	月	名 称	指導者・加盟人員	備 考
明治3 (1870)	～3 2～4 8 10～11	長州藩脱隊騒動 雲井竜雄營 東京襲撃計画 日田県の蠢動	大楽源太郎 1,800名余 雲井竜雄 処刑者59名 岡崎恭助(高知) 7名 大楽源太郎(山口)	前年11月より
明治4 (1871)	2～3 12	久留米の蠢動 愛宕通旭事件	水野正名(久留米藩大参事) 丸山作楽 61名	征韓計画
明治5 (1872)	5	熊本の蠢動		鎮台兵を襲撃
明治6 (1873)	7 12	福島県の蠢動 熊本鎮台内の暴動	第11番大隊丘卒	士族の官員取立、家禄復旧要求
明治7 (1874)	1 1～2 1 1 3	喰違事件 佐賀の乱 中津の動謠 福岡秋月の動謠 萩士族の動謠	武市熊吉 8名 江藤新平 11,647名 増田宋太郎 数百名 宮崎車之助 450名 奥平居正	岩倉具視を襲撃 県庁・小野組を襲撃 佐賀の乱に呼応 佐賀の乱に呼応・中止 佐賀の乱に呼応・中止
明治9 (1876)	3 10 10～11 10～11 10	警視庁内の不穏 神風連(敬神党) 秋月の乱 萩の乱 思案橋事件		山口・高知出身の警 視・警部 兵営・司令官・県令を 襲撃 千葉県庁・鎮台を襲撃
明治10 (1877)	1～9 5～6 8～9 8～9	西南戦争 長州町田党の蠢動 土佐勤王党の蠢動 愛媛飯淵・武田党 の蠢動	西郷隆盛 約3万名 町田梅之進 200余名 大石円 1,100余名 飯淵貞幹・武田豊城 40余名逮捕	九州各地 警察・大区扱所襲撃 計画 未発 未発
明治11 (1878)	5	紀尾伊坂の変	島田一郎 35名逮捕	大久保利通暗殺

(備考)後藤靖『士族反乱の研究』5～9ページ所収の「士族反乱年表」より作成、補訂。

この間に長州藩では幕長戦争から東北戦争で活躍した諸隊士脱隊騒動が頻発していた。その余波が九州に広がって、全国的な反政府運動へと展開していた。例えば、久留米の蠢動、愛宕事件などである（第8表）。そして、長州脱隊騒動首脳の一人、大槻源太郎が大分→久留米藩に逃げ込み、派遣された政府の巡察隊が薩摩藩兵の妨害に遭うという事件があった。これは中央政界の要人の亀裂を深める危機と直結した。また要人の間には政策の方向をめぐつて対立が解消されずにいた。このような情勢を開拓するためになされたのが、薩・長・土の三藩兵による親兵創設であった。これは西南雄藩が抱える藩兵の維持を国家に肩代わりする形でその負担を解消した側面を持つていたのである。

廃藩置県後に、新政府の要人たちの内、岩倉具視たちは欧米視察に出かけたが、西郷らは留守政府をあずかることになった。この政府には、禄制改革（秩禄処分）・徴兵制度などが具体的なプログラムにあがつてくると、彼らを支えていた出身藩兵の支持に動搖を来し、これに対処する方法が征韓論であった。

日田騒動と 佐賀の乱

騒動と日田騒動がある。前者の脱隊騒動は長州藩兵の正規兵化によって、漏れたものによる脱隊であるから、軍隊内の淘汰が行われたと考えてよいが、長州藩出身の新政府要人——木戸孝允——などには実に頭の痛いものであった。この騒動は明治三年（一八七〇）一月に木戸孝允・井上馨らによって鎮圧されたが、脱隊兵は藩を逃れて四国・北九州に潜入して、各地を騒がせた。このうち、脱隊兵の首領と目されたいた大槻源太郎は杵築藩姫島に潜伏し、さらに鶴崎に赴いて、六月には豊後竹田に逃れた。しかし、探索が厳しくなると、久留米の同志をたよつて同地にかくまわれた。

明治三年（一八七〇）十一月に日田県庁を襲撃するという風説が起つた。日田は旧幕領で日田郡代が置かれて栄えていたし、また新政府の九州支配の拠点でもあつた。計画が事前に漏れたので、直ちに警戒の網を張られ、日田県の要請で肥後藩・豊津藩からの出兵によつて未然に防がれた。ところが、この騒動は農民を動かし、十一月十九日県下に農民一揆が勃発して、村役人宅や日田の隈町・豆町の富豪などに対して打ちこわしが始まつた。その勢いが日田県庁にまで迫つてきたので、豊津藩に出兵を要請した。この一揆の勢いは十二月には府内藩領に、日出藩にも波及してたちまち豊後一帯に広がつた。新政府は豊前・豊後・筑後・肥後の諸藩に命じて警戒のために臨機応変の出兵を許した。

これらの背後には大槻らの策謀があつたとして、大槻らをかくまつた久留米藩の「藩難」となつたのである。大槻は久留米藩士によつて暗殺された。暗殺した吉田ら同志は、久留米藩に対する政府の穩便な処置を願つてすんで縛につき、東京に護送された。この久留米藩事件と、同じ時期に起つた公卿の愛宕通旭・同外山光輔（とやまみづけ）一件の類似犯として一括処理した（愛宕事件・外山事件）。二人の公卿は自刃を命じられた。

さて、いわゆる士族の反乱とは、具体的には明治七年（一八七四）の佐賀の乱に始まる。この乱は開設早々の内務省（設置は明治六年十一月）任務の最初のテストケースとなつた。つまり、内務省としては国内治安対策として管轄下にあつた警察が直接にあたり、必要に応じて鎮台兵の出動をもつて迅速に行うという新政府の内治政策の柱であつたのである。

江藤新平は征韓論をもつて木戸・大久保と対立するに当たつて、同県人の同志の結束を図つた。すなわち朝倉尚武は江藤の意を受けて帰県して、中島鼎藏・山田平蔵などと協議して、佐賀において十二月征韓党を

結成した。

征韓論諸参議の下野の行動は微妙に異なつていたが、その後の行動は大きく分かれた。西郷隆盛は明治六年（一八七三）十一月に鹿児島に帰県した。他の者は翌七年一月、板垣退助・後藤象二郎・副島種臣・江藤新平の四人を中心とした者が愛国公党を結成、民撰議院設立建白書を出した。しかし、この結束はそんなに固くなく、各自が自分の道を進んで分散してしまい、肥前組の江藤と副島はしきりに郷里佐賀の同輩たちから帰県を促されていた。江藤は民撰議院設立建白書に署名して、そのまま帰県の行動に移し、東京を去った。明治六、七年の佐賀地方は不穏な空気が充満していた。それは、当時の佐賀県下の特殊な情況によるところが大きい。明治六年の作柄が不作となつて米価が高騰していたこと、征韓党の外に憂国党（新政府そのものを否定する保守派、法琳院派とも封建党ともいつた）・中立党などの結束がなされていたことであつた。また、岩村高俊新県権令が赴任したとき、武力を率いての佐賀入りをしたことなどである。さらに、佐賀県士族の場合、外の県士族も同様であるが、ことさら大蔵省の家禄処分に対する不満は非常に強く、反発はかなり高揚していた。

しかし、これらの党の間には隔たりがあつて、交流は無かつたのであるが、権令岩村の傲慢な態度から彼らを結束させたといふ。

このような佐賀県下の不穏な状況に憂慮した大久保利通は、みずから鎮圧の権限（内務・鎮台兵などの指揮権）を掌握して、九州に下り、福岡に本営を置いた（明治七年一月）。それ以前に、熊本鎮台の谷干城に出動を要請した岩村高俊権令（前権令岩村通俊の弟）は、鎮台兵一大隊六四八人とともに佐賀城に入った。これを

機会に、江藤は征韓党の幹部と協議して挙兵を決意し、こうして憂国党とともに、佐賀城の攻撃を行い戦闘が始まった。一時佐賀城を占拠したものの、三月には鎮台軍によって佐賀城は奪回され敗北した。この戦いで有効な戦闘手段としての電信が大いに役立った。江藤は佐賀を後にして鹿児島に向かい、西郷を尋ね蹶起を促したが物別れに終わって、土佐をさして四国にわたりそこで捕縛された。この時の用兵は鎮台兵のほかに、福岡・小倉・三潴・大分・長崎・山口などの諸県令に訓令して、管下の士族を徴募して貫旗隊と呼ぶ士族隊を編成された。この戦いで、中隊長沢田正武以下三〇人の豊津藩士の戦死が確認される。

この事件の後始末は大久保利通の主導のもとに短時間になされた。佐賀に設けられた臨時裁判所によつて、江藤および憂国党の島義勇(しまよしゆう)は、かつて司法卿江藤の下で廃止された梶首(きょうしゅ)の刑に処せられた。政府は極刑による権威の誇示をねらうとともに、後述する征台の役や江華島事件で事を構え、士族反乱のエネルギーを外に向けようとしたのである。後述するように、その効果は無かつた。

(二) 秋月党の動き

秋月党の挙兵

明治九年（一八七六）三月の廢刀令、同年八月の家禄廃止の布告を契機に、開明政策反対、排斥攘夷に名をかりて士族たちが反乱を起こした。武力反抗の口火を切ったのは熊本の神風連(じんぷうれん)（熊本敬神党）に属する士族だつた。神風連の乱である。

熊本敬神党の挙兵は、十月二十四日の深更、熊本鎮台を急襲し、その兵営を占拠した、しかし、戦況は夜

明けには逆転して敗色ははつきりしていた。その時には既に、二十五日夜半過ぎに秋月の士族へ召集がかかっていた。また、敗退の報があつたのは翌々二十七日の早朝であった。熊本の第一報（一時の勝利）に基づき、福岡・佐賀・柳川・久留米、それに豊津に密使が派遣された。そして、豊津藩の士族の決起を促すため、磯平八・小野亀喜が、豊津の保守の代表杉生十郎に接触した。杉生は彼らに数日の猶予を求めた。

秋月党の党首今村百八郎が、二十七日本陣西福寺を出て行動した時には、熊本敬神党の乱は鎮圧された。また、福岡・佐賀・久留米もこれに呼応しなかつた。さらに、萩での前原一誠の動きも分からぬ時点で、加えて首謀人というべき益田静方は佐賀士族の工作に出かけたまま行方不明、こういった状態の中での拳兵であつた。

秋月党は、次の二つの性格をもつた集団であった。一つは磯淳・宮崎車之助らの穩健漸進主義の上級武士層を中心とする学校組、今一つは益田静方・今村百八郎（車之助の弟）を中心とする急進的な下級武士層で、田中八幡宮に集まつたので天神組という。

二派に共通している主張は開明政策反対、國權拡張であり、特に下級武士層の天神組は氏族の生活困窮は新政府の对外弱腰に起因していると断じて、政府打倒を唱えるのである。そして、天神組は勢力を増やし、八幡宮から本陣を西福寺に移して、武装を強化して決起をまつた。

秋月党の行動

今村百八郎は、秋月の夫婦岩で旧福岡藩士を斬殺して決起した。そして、秋月町を出て甘水谷に入り、そこで敬神党の苦戦を伝えた宮崎伊六に磯平八を随行させて、豊津に先行させた。この宮崎伊六は実は熊本に赴いて帰つたばかりである。しかも、「神風連ノ持ムニ足ラザル」との有

名な進言をした。敬神党はあてにならない、すべきでは無いという意味ではなく、「徒勞」であると言つたのである。しかし、決起した後で中止には至らず、むしろ暴走してしまつた。こうして、甘水谷から難所を越え、白坂峠を越え、瀬戸内・高畠・千手と山道を通つて、嘉穂郡大隈村に向かつた。総勢二四〇人、二五〇人の者たちであつた。この千手村で豊津から熊本の探索に派遣された友松淳一郎・山川孝太郎たちに遭遇した。

この時、秋月党の者たちは一人に対して、すでに敬神党は敗退したことを探り、長州に赴く途中で豊津に立ち寄りたい旨を申し入れた。この時、豊津藩士は「何レニ至ルヤ」と問ひ、「渠レ（渠魁の意）答へテ曰ク、將ニ豊津ニ至ラントス、二ノ（二人が）曰ク、今豊津ニ至ルモ豊津必ス之ヲ退ケン」と押し留めたが、彼は耳をかさず、次のように言つた。「肥後事ヲ拳ルヤ、長州必ス應セント約ス、我輩長州ノ違約ノ罪ヲ問ハント欲ス（中略） 師ヲ起シテ此ニ至ル、何ソ空シク還ルヘケンヤ、沿道豊津ニ至リ依頼センと欲ス」と強く要求した。そこで友松淳一郎は、帥（挙兵隊士）に先立ち豊津に還り、残る山川孝太郎を秋月党に随行させた（文中の史料は、「旧秋月藩士豊津侵入戦争次第并手負賊討取捕縛人名御届」 小笠原文庫一七八）。この秋月党の渠魁の言つたことは、明治九年（一八七六）八月、前原は同志の幹部十数人と船を松本川に浮かべて密議し、熊本の敬神党・福岡の秋月党と東西相呼応して挙兵することをさしている。敬神党は十月二十四日、秋月党は二十六日をもつて蜂起した。実は前原も秋月党と同じく二十六日に蜂起していたのである。前兵部大輔前原一誠の萩の乱である。

この後、秋月党は大隈村に入り、小区役所を襲い、次いで夜半に旧小倉藩領の田川郡猪膝村に至り、同所

第3章 豊津台地の歴史

の新屋（造り酒屋、中村氏）を本陣とした。そこで嘉穂郡大隈村で捕らえた巡査を殺害した事件と、この新屋において、同党的一人宮原喜蔵が自殺するという事件が発生した。翌十月二十八日、田川郡油須原村に入る。

この時、「同二十八日渠レ尚留ラス故、孝太郎彼ノ師ト俱ニ油須原ニ至リ同所ニ留マラシメ」て、豊津に還つて様子を報告する。還つた

山川孝太郎の報によつて、豊津士族は衆議を決して藩士を油須原に遣わして「主義ハ同意ナルモ拳兵賛成シカネル」との正式回答した。同二十八日午後十一時には本隊は油須原にあつたが、先頭集団は石坂にあつた。そして夜半に豊津に至ろうとしていた（第27図参照）。豊津はまさに目前である。午後十二時、秋月士族土岐真澄・鈴木安香両人が育徳学校（生駒九一郎校長）を訪れ、杉生十郎に面会を求めた。彼が不在として、「入江淡（筆者注：学長）・石川巖太両氏秋月両氏ニ接」（前出、小笠原文庫一七八）して、彼らを説得しようと試みたが失敗した。同史料によれば、同二十九日秋月士族はますます進行して豊津に迫る勢いありとの報が頻りにもたらされていた。

鎮台兵と明治四年（一八七一）四月、東山道鎮台 本營石巻 分營福島・盛岡、西海道鎮台 本營小倉 分營博多・日田との布告が、太政官から出された。そして、この西海道鎮台



第27図 秋月党戦闘要図
(川上水舟『秋月党』より)

兵として、熊本・佐賀両藩の兵一大隊ずつを差し出させた。このため兵部大丞の井田讓が小倉に着任し、佐賀藩士前山清一郎（前述 戊辰戦争の項参照）が兵部省出仕を命じられて、博多分営に出張した。さらに、明治四年七月十四日の廃藩置県断行後八月、兵部省達として、東京鎮台・大阪鎮台・鎮西鎮台・東北鎮台が置かれた。鎮西鎮台は小倉、当分は熊本に置き常備兵は第二大隊の構成とし、管轄地は豊前・豊後・筑前・筑後・肥前・肥後・壱岐・対馬とした。また、第一分営は広島に置かれ、常備兵力は歩兵一大隊、第二分営は鹿児島に置かれ、常備兵は歩兵四小隊である。

明治八年（一八七五）一月、熊本鎮台歩兵第二十六大隊が小倉に移動した。この大隊を中心として、歩兵第十四連隊が編成された。また、明治九年（一八七六）四月、小倉県を廃して福岡県に合併した。こうして、徴兵制度による国家の軍隊が形成されてきた。

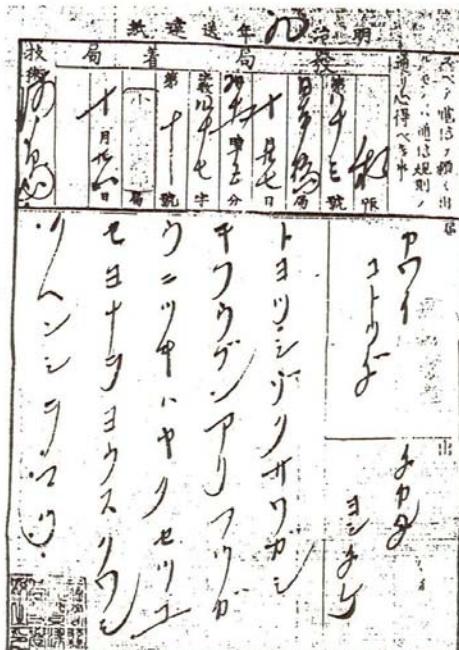
熊本敬神党の乱について、十月二十五日の日記には、「肥後国熊本鎮台所、昨夜賊徒數名押寄、暴動乱妨」とあり、さらに二十七日では、「小倉鎮台兵二中隊、今朝出立、筑前直方村迄出張」（『中原嘉左右日記』第3巻五〇六ページ）との情報に、小倉の豪商中原嘉左右は接している。これは、秋月党が筑前方面に向かつているとの情報によっている。ところが、秋月党が小倉街道を進むとの報から小倉鎮台兵は撤収した。また、豊津士族の蜂起があるのでないかの風聞があるがどうかという電文が第28図のように、東京より打電されていて、佐賀の乱と同様に電信が活用されていた。

秋月の乱については、十月二十八日、「一、小倉鎮台所より」として、歩兵第十四聯隊長心得陸軍少佐乃木希典から豊前各區区あてに説論文が出された。元秋月藩の者どもが、多人数して兵器を携えて、小倉街道

に進入しようとしているように聞いている。

鎮台営所近傍において、右のようすに傲慢・不逞の輩は、その趣旨如何を問わず、「兵權ニ接触」すると、明らかに士族層には兵權がないことの見解を示し、やむえず「進伐」するという内容であった。また、動搖を防ぐように、特に士族の同調者を出さないよう説論している。そして、一大隊を田川郡香春へ出兵することに決定し、また、二中隊が同夜出動、翌日には二中隊を出兵、行事（現行橋市）から田川郡へ向かわせた。

一方、豊津藩士山川孝太郎は田川郡油須原村に秋月党を留めて置いて、豊津に還つて情勢の報告をした。
そこで当然、豊津の氏族の「方向ヲ定メンコトヲ議シ、秋月ノ暴動ニ応ゼザルヲ約ス、因テ之ヲ防ゲノ策ヲ議ス」と態度決定をしたが、秋月党の進入を防ぐためには、藩士を集め、武器を携えざるを得ないことになる。この点は「縣庁ニ対シ大ニ恐レ」があること、武器は皆厳禁があるので、一応刀を袋に入れて集合し、出来るだけ穩便に説論の方針を衆士に示した。
秋月党の侵入に備えて次の方策をとつた。



第28図 電文

一、統命院村に、氏族五十人を配備し警戒に当たらせる。

一、小倉鎮台の来援を願う。

一、杉生十郎を秋月党に会わせない。

この杉生十郎を秋月党に会わせないと決め、監禁までしたのである。その理由は、杉生が秋月党と手を結んで豊津藩士の決起を画策しようとする者と考えられたからである。豊津藩士の中で、彼は排外攘夷主義の中心的人物として、矢野半弥らとともに秋月の志士と交わりをもつていたし、前原一誠一派の長州藩士とも親密に關係にあつた。だからこそ、秋月党も杉生を頼みにして豊津方面から、山口をめざし前原一誠たちと手を結ぼうとして反乱を起こしたのである。

豊津戦争 十月二十九日、油須原村を出発、石坂峠を通過して仲津郡木山村（現犀川町）に集結した秋月党の本隊は、そのまま警固に当たつていた豊津藩士の制止を無視して統命院村を通過し、

藩庁付近にある豊津育徳学校へ向かつた。こうして、正午には一隊は豊津小学校から豊津藩庁あたり一帯に陣取り、もう一隊は豊津氏族が集結している育徳学校を囲んで武力威嚇をもつて、挙兵同調を促した。しかし、応対した育徳学校校長入江淡は強要してくる秋月党の勢いに「余既ニ同意ス」と時間かせぎをしながら、鎮台兵の到着を待つた。

午後四時ごろ、鎮台兵が八景山に陣をしき豊津の様子を窺つていた。この時、秋月党が小笠原氏の金庫を襲おうとしていることを聞いて、隊長の津下少佐は兵を二手にわけて攻撃をかけた。こうして、秋月党は防戦し、白兵戦に至つたが散りぢりに敗走した。

第3章 豊津台地の歴史

『中原嘉左右日記』の十月三十一日には、手紙によつて豊津の様子を記している。すなわち、「豊津戦争賊徒十武人豊津藩士之手江討取（中略）田川郡出兵之「中隊も本日豊津へ集り、一大隊と相成候」とあって、豊津戦争の豊津藩士の活躍および鎮台兵の動きを記している。また、秋月党の鎮静によつて、田川出兵の兵および豊津派遣の小倉鎮台兵の小倉鎮台所帰營を簡単に記している（十一月一日の条）。

この「豊津戦争」の舞台は育徳学校や本町方面であつたが、もうひとつ、木山村から統命院村を経由して育徳学校を目指した本隊とは別に今川西岸を下り、彦徳村方面にもう一隊があつた。ここ秋月党兵は全滅した。本隊の方は、戦死十六ゝ十九人・捕虜六ゝ八人、鎮台兵の戦死者二人、豊津士族の戦死一人であつた（第29図参照）。午後七時、秋月党はことごとく敗北し、彦山方面を目指して逃げ去つた。

なお、田尻八郎氏の『秋月党遺聞』の中の紹介として、宮崎車之助の「陣中日記」に次のような記事がある。

一、育徳館五、六百人宗執事 入江 淡

副議員 清水 集

山田彦次郎

一、玉薬 四五荷 鉄砲数百挺

一、金銀 聊も手を不付

育徳館五六百人降参の内



第29図 秋月士族の墓

一、二十歳より三十歳迄五十五人

右豊津士族兵員召使候含

一、入江淡同意加担の書面宮崎伊六へ渡置也

一、仲津郡豊津

一、海 萩島 沢尾

これによると、秋月党は小笠原内家の金庫には手を付けなかつたこと、豊津の育徳館における豊津士族の兵力が分かること、蓑島から長州に渡ろうとしていたことが分かる。

乱の終結とその後 秋月党は小石原を経て江川村に入つた時には六〇~七〇人の少人数になつてゐた。この夜、集結した者を前に今村百八郎は解散を宣言した。その地で、磯淳や宮崎車之助らはそこで自刃した(彼らの多くは「学校組」)。それでも、今村は二七人の有志を率いて討伐隊の待機する秋月学校を急襲した(十一月一日)。そして、投降をする者、逮捕された者、離散潜伏する者などで秋月党は壊滅した。

その後、小倉鎮台兵は十一月二日に、萩の乱に際して、警備のため馬閥(下関)に派遣された(『小倉市誌』続編 三三七ページ)。なお、萩の乱の鎮圧には、広島鎮台の山口駐屯兵を主力とする官軍が、十月六日まで

戦つた。鎮台司令長官三浦梧楼は熊本へ赴く途中を小倉から山口に来て指揮を執つた。

この秋月党の事件後、豊津藩士杉生十郎・友松淳一郎らは福岡に拘禁された。釈放後、植木枝盛と交友を持つようになったのは友松である。こうして、明治十一年(一八七八)十一月三十日、枝盛は豊津を訪れ、

二月谷にあつた杉生を訪問し、三・四日滞在した。翌年には、愛国社大会に杉生は「豊津合一社」の代表として参加し、第三回大会には幹事の役目を務めた。

このように、自由民権運動を推進した者がいたのである。このことは、先述したように士族の反乱を単なる反政府運動と見なしたり、攘夷主義者として反抗したことのみを強調する見方をしないように戒めているよう思えてならない。

最後に、この士族の反乱は西郷隆盛の挙兵—西南戦争—を最後に、明治維新は終わり告げ、新しい明治國家体制へと向かうのである。この西南戦争にも豊津藩（県）関係者が参加し、戦死者として四人の者が確認され、豊津も決して無縁ではなかつたのである。